

## マネジメント専攻を振り返って

内にコスモスを持つ者は世界の何処の辺遠に居ても常に一地方的の存在から脱する。内にコスモスを持たない者はどんな文化の中心に居ても常に一地方的の存在として存在する。

——高村光太郎

2000年（平成12年）4月、5つの国・地域の外国籍教員を含む18名スタッフを擁するマネジメント専攻（独立専攻）がスタートした。設立以来20年、大学法人化に伴う4講座から3講座への組織改編（2004年）や、アジアマネジメントプログラムの増設（2008年）等を通して、マネジメント教員組織と教育プログラムの合理化を推し進めつつ、教育研究活動を強力に展開していった。博士課程前期374名、博士課程後期46名の修了生を送り出し、地元広島をはじめとする全国の企業や行政に人材を提供すると同時に、大学などの高等教育機関に教員を約30名、中国などアジア進出日系企業に人材を約50名養成してきた。

設立20周年という節目に、マネジメント専攻のために尽力された各位の努力を思い起こさずにはられない。榎本 悟、星野 一郎（故人）、戸田 常一、井上 善海、村松 潤一歴代専攻長（兼マネジメント学会長）とマネジメント専攻設立に当初より深く関与された阪口 要教授（故人）、Goldsbury, Peter Anthony 名誉教授、椿 康和名誉教授をはじめ、退職または他大学、他部署に転出された数十名もの教職員一同に感謝の言葉を捧げたい。そしてまた、手元にある「修了生論文題目一覧」に目を通して、400名以上の修了生各位にありがとうと言いたい。学生諸氏の鋭意研鑽なくしてマネジメント専攻、マネジメント学会は成り立たないものである。

今春、人間社会科学研究科の新設に伴うマネジメントプログラムが立ち上がったが、改めてマネジメントとは何かを考えたくなる。朝日新聞記事データベース（きくぞう）で検索してみると、「マネジメント（マネージメント）」は、1924年に「サイエンティフィック・マネージメント」という複合語に初出を見、固有名詞から普通名詞への固定化、一般化の長いプロセスを辿ったようである。今や「アート・マネジメント」、「コミュニケーション・マネジメント」という用語も用いられるように、マネジメントは既存の概念から脱皮し、「経営管理」などに限定せず、人間活動の様々な側面に射程が及ぶ1つの学問分野として成立している。とはいえ、「理論知」と「実践知」の融合を目標に掲げる我々のこの教育研究集団の「知的共創の場」という性格付けに何1つ変わりはない。20年以上マネジメントと関わってきた私には、そんな思いがある。

新研究科の最大特徴の1つとしては、開設された共通科目と他プログラム授業科目の必修化が挙げられよう。それまでの型に固執しない、垣根を越えたディシプリンの確立が期待されるのだろうが、毎年博士課程前期28名、後期12名というほぼ従来どおりのニューカマーを迎えて知的協働を遂行するという教育目標を達成できるのか。これからその真価が問われるに違いない。

広島大学マネジメント学会 会長

盧 濤

2020年12月に東千田キャンパスにて